

『詩の弁護』における P. B. シェリーの鏡再考

動詞 reflect の意味を手掛かりに

池 田 景 子

序

1820年にトマス・ラヴ・ピーコック (Thomas Love Peacock) は「詩の四つの時代」(“The Four Ages of Poetry”)と題した評論を発表し(以下、“Four Ages”と略記) 同時代の詩人らを社会の知的向上には貢献度が低い存在として酷評する。社会に対して貢献度の低い文学の代わりに、ピーコックは、数学、天文学、化学、倫理学、形而上学、歴史、政治、政治経済のような学問こそが、「永続的に有益な目的」を持ち、社会の知的質を高め得ると評している(“permanently useful ends and aims”[“Four Ages” 18])。このように扱き下ろされた当世の文学を擁護するため、ピーコックの友人、パーシー・ビッシー・シェリー (Percy Bysshe Shelley) は1821年2月から3月にかけて評論『詩の弁護』(A Defence of Poetry)を執筆し、詩が社会に果たす貢献面を強調する(以下、Defenceと略記)。『詩の弁護』の最終段落を見ると、シェリーは社会における詩人の役割を鏡の比喻で強調している。¹ P. H. バッター (P. H. Butter) によると、『詩の弁護』の鏡は、1819年に執筆された詩作品「天へのオード」(“Ode to Heaven”)と同様、人間精神の真理を表す(“a profound psychological truth”[Butter 12])。バターは、『詩の弁護』における詩の特質とも齟齬をきたさない。『詩の弁護』において、詩は鏡に喩えられ、詩人の精神のみならず、人間全般の精神を映すからである(Defence 515)。² だが、バターを含めた先行研究の議

論は、『詩の弁護』における鏡の比喻すべてを取り上げていない。³ むしろ、先行研究は『詩の弁護』における鏡を、十把一絡げに、精神の＜像を映す＞ものとして型に嵌め、この比喻が詩の社会貢献面を強調するために機能している点は看過されてきた傾向がある。本論考では、『詩の弁護』において最初に登場する鏡の比喻を中心に扱い、そこで併用される動詞 reflect の意味を検討することで、鏡が反射鏡としても機能している点に注目したい。さらに、『詩の弁護』においてシェリーが詩の社会貢献を強調する際に、鏡による光の反射が詩の社会的効力を表すのに欠くべからざる比喻であると立証する。

1 . 動詞 reflect の意味

シェリーは『詩の弁護』の中で、詩を、作品として固有の形式を有した「制限された意味での詩 (Poetry, in a restricted sense)」と、人間の思想に内在する「普遍的な意味での詩 (Poetry in an universal sense)」の2つに分類する (Defence 535)。評論の前半で、シェリーは制限された意味での詩（韻文として形象を持った詩）に対する定義を試み、後の段落で制限された意味での詩から普遍的な意味での詩（抽象化された、観念的な詩）へと議論を発展させていく。制限された意味での詩に注目して議論を展開していく際、シェリーは言語による芸術（詩）と言語以外の芸術様式（具体的には、彫刻、絵画、音楽）を比較する。シェリーは、『詩の弁護』の中で韻文と散文の違いに深く拘泥していないため (Verkoren 125)、言語による芸術は詩を指すと言ってしまってもよいだろう。

[...] language is arbitrarily produced by the Imagination and has relation to thoughts alone; but all other materials, instruments and conditions of art have relations among each other, which limit and interpose between conception and expression. *The former is as a mirror which reflects, the latter [is] as a cloud which enfeebls, the light of which both are mediums of communication.* (Defence 513

emphases mine)

これは、シェリーが詩の言語形式と言語以外の芸術様式を比較する箇所である。言語芸術と言語以外の芸術様式はそれぞれを鏡と雲に喩えられ、詩（鏡）の優位性が主張される。引用の最終文を詳しく見ると、冒頭にある“*The former*”は“*language*”を、“*the latter*”は“*all other materials*”を具体的に指す（*Defence* 513）。引用文以前の文脈を参照すると、この“*language*”とは具体的に「韻律の言葉（metrical language）」を表しているのがわかる（*Defence* 513）。つまり、前者は（詩の）言語、後者は言語以外の芸術様式となる。両者の比較の中で、詩は鏡に喩えられ（“*The former is as a mirror*”[*Defence* 513]）、その鏡の性質が関係代名詞 *which* 節内でつぶさに描写される（“*which reflects [...] the light of which both are mediums of communication*”[*Defence* 513]）。関係代名詞節内の動詞は“*reflects*”であり、目的語に“*the light of which both are mediums of communication*”をとる（*Defence* 513）。英文のシンタックスを複雑にしているのは、“*reflects*”と“*the light*”の間に割り込んだ、言語以外の芸術様式が雲に喩えられる表現である（“*the latter [is] as a cloud which enfeebls*”[*Defence* 513]）。さらに、“*enfeebls*”は、“*a cloud*”を先行詞とする、2つ目の関係代名詞 *which* 節内における動詞だが、動詞“*reflects*”と同じ目的語を共有する（*Defence* 513）。つまり、意思疎通の媒体となる光を、前者（詩）は鏡として reflect(s) するのに対し、後者（詩以外の芸術）は雲であるがゆえにその光を弱めてしまう。

このように、鏡に喩えられた詩の言語は、表象の直接性を強みとしている。シェリーによれば、詩は人間の内面にある情熱や動きを直接的に表現できるからである（“*this [poetry] springs from the nature itself of language, which is a more direct representation of the actions and passions of our internal being*”[*Defence* 513]）。だが、本論考で重要なのは次の2点である。まず、シェリーが詩の言語を鏡に喩えていること。第2に、この鏡の特質を描写する動詞“*reflects*”の意味をどう解釈するか、である（*Defence* 513）。OED を参照すると、動詞 *reflect* の定

義は15項目にのぼるが、『詩の弁護』において reflect(s)が鏡と併用されている点、及び、用例の年代がシェリーの時代に合致する点を考慮に入れると、本論考で関係のある定義は自然と2つの定義に絞られる。まず目につくのは、定義 6 a. である。定義冒頭の但し書きには、“Of mirrors or other polished surfaces” とあり、鏡との強いコロケーションを条件にして、意味は“To give back or exhibit an image of (a person or thing)”もしくは“to mirror”となっている(OED, “Reflect”, def. 6.a.)。シェリーはプラトン(Plato)からアイデアの概念を少なからず受容しており、ナルキッソス神話やナルシズムへの傾倒も、シェリーの韻文作品に見られる。⁴ このような傾向を踏まえると、OED の定義 6.a.が『詩の弁護』に最初に登場する鏡と併用されていた reflect の意味に対応すると思われる。

2. 動詞 reflect の意味をめぐる先行研究

『詩の弁護』において最初に登場する鏡に対して、ある程度紙面を割いて言及している先行研究を整理すると、1953年のエイブラムズ(M. H. Abrams)による『鏡とランプ』(*The Mirror and the Lamp*)まで遡ることになる。エイブラムズは、シェリーの『詩の弁護』における鏡と雲の比喻を引用符付きで引き合いに出し、議論を進めているのは明らかである。

[...] Shelley, like many of his contemporaries, reverses the aesthetic mirror in order to make it reflect the lamp of the mind: the language of poetry ‘is as a mirror which reflects,’ but the materials of the other arts ‘as a cloud which enfeebls, the light of which both are mediums of communication’. (Abrams 130)

エイブラムズによると、18世紀古典主義からロマン派文学にかけて、作品の扱う主題が外から内へと移行するのに応じて、鏡の比喻が映すものも外界にお

ける現実から人間の精神面へと変化した、という。つまり、シェリーの鏡もまた、同時代のロマン派詩人の描く鏡と同様に、単なる模倣芸術として外界の事物を映す鏡ではなく、詩人の内面にある精神のランプを reflect する鏡なのである。但し、エイブラムズは、故意的であれ、無意識的であれ、reflect の意味を明確にはしていない。

エイブラムズの次に『詩の弁護』の同一箇所と言及しているのは、1984年のウィリアム・キーチ (William Keach) である。キーチはエイブラムズの議論を踏襲して、シェリーの鏡の比喻を「精神を reflect する言語能力を喻えた比喻 (a figure for the capacity of language to reflect the mind)」と称す (Keach 18)。一方で、キーチはシェリーの鏡が抱える曖昧さも指摘している。

The ambiguity of the mirror image is made apparent by Shelley himself four paragraphs later: [...] The movement from the simile of a distorting mirror to the metaphor of an idealizing one is revealing, since in the earlier passage language is 'as a mirror' (my emphasis) [sic], and since *neither a distorting nor an idealizing mirror exactly reflects the light it receives*. While in comparison to other media language may be an idealizing mirror, in relation to thought or conception itself it may necessarily be as obscuring as the cloud to which it is here contrasted [...]. (Keach 18 *emphases mine*)

キーチの分析によると、シェリーの鏡は受け取る光を正確に reflect できない。その理由として、『詩の弁護』における鏡の比喻に、対象を「ゆがめたり (distorting)」「理想化する (idealizing)」側面があるからである (Keach 18)。上記引用の強調部分で、キーチが言及する “a distorting [...] an idealizing mirror” の部分は、シェリーが詩と歴史をそれぞれ鏡に喻え、両者の性質を比較する箇所に対応する。⁵ つまり、キーチは『詩の弁護』の最初に登場する鏡を分析する際に、後の段落でシェリーが用いる鏡の比喻と照らし合わせて、鏡の比喻の

特質を考察しようとしているのである。一方で、その鏡が行う動作部分、“reflects the light”は、『詩の弁護』において最初に登場する鏡を意識した表現である。⁶

但し、キーチは、“reflects”の目的語を「それ すなわち鏡 が受ける光(the light it receives)」として、シェリーのテキストには存在しない“it receives”を追加し、自らの所見を差し挟んでいる(Keach 18)。動詞“reflects”の目的語が「鏡が受け取る光」とであるとすると、キーチの“reflects”は<像を映す>意味では用いられていないだろう(Keach 18)。OED を再び確認すると、“To turn, throw, or cast back (beams, rays, or light)”の定義が存在する(OED, “Reflect”, def. 5.a.)。この定義冒頭に見られる但し書きには“Of bodies or surfaces, esp. such as are smooth or polished”とあり、定義 6.a.よりも適用範囲が広いが、鏡も十分その範囲内に含められ得る(OED, “Reflect”, def. 5.a.)。キーチの場合、動詞 reflect の意味は<反射する>であり、『詩の弁護』における最初の鏡を光の反射鏡と考えている節がある。そこで、『詩の弁護』における最初の鏡に戻り、動詞 reflect の意味を確認したい。シェリーによると、詩の言語形式は言語以外の芸術様式を凌ぐ。この主張の根拠は、雲(言語以外の芸術様式)が光を弱めて間接的に伝播するのに対し、鏡(詩)は直接光を伝播できる点にある。雲と鏡の比較を通して、鏡の伝播力が持つ直接性を引き立たせるのがシェリーの意図である。そうすると、件の箇所は、鏡面における写像を比喩的に描写していると捉えるよりもむしろ、鏡による光の反射と捉える方が、シェリーの意図により適った解釈になる。ゆえに、動詞 reflect(s)を「光を投げ返す」と捉えた、キーチの解釈に軍配が上がる(“To turn, throw, or cast back [beams, rays, or light]” [OED, “Reflect”, 5.a.])。

3. 鏡が持つ社会的効力

ただ、エイブラムズが明言を避けたように、鏡による写像と反射は原理的に同一の現象である。また、『詩の弁護』における鏡は、詩、戯曲、詩人のいず

れかを喩えるために用いられ、比喩の指示対象もほぼ同一である。したがって、写像と反射の違いを区別して、『詩の弁護』における鏡の機能を分類したところで、その考察結果は非生産的である。だが、『詩の弁護』における目的は、詩の表象原理を体系化するだけではなく、詩が社会にもたらす効力をその社会的貢献面として強調することである。ゆえに、鏡（詩）が、その表面上で、詩人の構想を映し出す表象だけではなく、鏡面で受け止めた光（詩人の構想）を外の世界へと跳ね返していく現象も、シェリーの詩論にとって重要な比喩のはずである。たとえ、鏡による写像と反射が原理的に同一の現象であったとしても、両者の間には見え方の違いがあり、写像のみに焦点を当てるのは、シェリーにおける鏡の比喩を理解する上で偏りが出るのではないか。例えば、『詩の弁護』の締めくくりでシェリーは、当世のイギリスが画期的に知的発展を遂げた社会であり、それゆえにその中で詩人の果たす役割は極めて大きい、と豪語する。

Poets are the hierophants of an unapprehended inspiration, *the mirrors of the gigantic shadows which futurity casts upon the present*, the words which express what they understand not, the trumpets which sing to battle and feel not what they inspire: the influence which is moved not, but moves. Poets are the unacknowledged legislators of the World. (*Defence* 535 *emphases mine*)

引用冒頭で、詩人には“the hierophants of an unapprehended inspiration”の称号が与えられ、その社会での預言者的役割を担うことが示唆される(*Defence* 535)。さらに、この“the hierophants”は鏡に言い換えられる(*Defence* 535)。引用強調部分における“the mirrors”と“the gigantic shadows”をつなぐ前置詞 of が、両者の間で目的格の関係を作り出すため、“the mirrors of the gigantic shadows”は「巨大な兆しを映す鏡」と捉えるのが文法的にも文脈的にも適切である(*Defence* 535)。一方で、“shadows”に後続する関係代名詞 which 節内の“futurity

casts upon the present ”を見ると、鏡に映された「巨大な兆し」とは、未来から現在へと投げたものであるとわかる (*Defence* 535)。このように、詩人は「未来が現在に投げかける巨大な兆し」を映し出すと同時に、その「兆し」を未来から受け取って現在の社会へと跳ね返す (*Defence* 535)。預言者として鏡（詩人）が社会で果たす役割は、鏡面（詩のテキスト）で「巨大な兆し」を表象すると同時に、その「兆し」を反射するのである (*Defence* 535)。

一方で、シェリーの意識の中で、鏡による写像と反射の現象が、見え方に違いがあったとしても、切り離せない、同一の現象だとすると、少なくとも、『詩の弁護』において、鏡が映すものと反射するものは、同一のものを指す。すなわち、鏡が映す「未来が現在に投げかける巨大な兆し」とは、『詩の弁護』における最初の鏡が反射する光とも言える。⁷ 確かに、『詩の弁護』の中で鏡による光の反射は、詩の社会的効力として描かれている。シェリーは、古代ギリシアの詩・戯曲（鏡）は、詩人の詩想（光）を映し出し、内乱、アジアの強奪、マケドニアやローマの支配のような危機を乗り越えて、時代を越えて存続し、社会を改革する可能性は失わず、他の芸術とともに後世の社会に光を照らしてきた、という（“ [...] written poetry existed at that epoch simultaneously with the other arts, and it is an idle enquiry to demand which gave and which received the light, which all [...] have scattered over the darkest periods of succeeding time ”[*Defence* 518]）。また、シェリーは、ピーコックが「詩の四つの時代」で看過している点として人生に影響を及ぼす戯曲の効力を挙げる。興味深いのは、シェリーがこの効力を、敵にとっては耐え難いほどの強烈な光を放つ鏡のようだ、と定義している点である（“ the mirror of intolerable light ”[*Defence* 519]）。この鏡は光の反射鏡であり、その効力は、「魔術師や異教徒 [のような邪悪な] 軍勢を盲目にして追い散らす (blind and scatter whole armies of necromancers and pagans)」ことにある (*Defence* 519)。但し、反射鏡の比喻における主張の主眼点は、あくまでも戯曲の効力であるため、鏡が放出する光が敵勢に与える攻撃力に強調が置かれ、動詞は reflect の代わりに、「追い散らす (scatter)」や「盲目にする (blind)」

といった表現が用いられている(Defence 519)。このように、『詩の弁護』における鏡は、その鏡面で詩人の概念を映すだけにとどまらず、鏡面の外へと光を跳ね返す。鏡の写像だけではなく、鏡による光の反射によって、シェリーはより強く、詩の社会的貢献面を擁護したかったのだろう。では、鏡(詩)が社会に効力与える際に、その鏡面に何を映し出し、どのように鏡面の外へ伝播しているのだろうか。

4. 鏡が映すもの

『詩の弁護』において最初に登場する鏡が反射していたのは、光である。シェリーは詩の言葉を鏡に喩え、光を「意思疎通の媒体(mediums of communication)」と称す(Defence 513)。さらに、この「意思疎通の媒体」を突き詰めていくと、これは詩人の「構想(conception)」、もしくは「思想(thoughts)」であり、「われわれの内なる存在の動きや情熱(the actions and passions of our internal being)」である(Defence 513)。そうすると、詩が表現する構想・思想は、詩人の精神に内在すると同時に、詩人の外側、すなわち人間全般の精神にも存在することになる。このような詩想(詩人の思想・構想)の普遍性は、詩と歴史の比較においても強調される。『詩の弁護』でシェリーは、詩が扱う主題にも目を向け、「一篇の詩が表すのは、永遠の真理において表現された、まさに人生の像(A Poem is the very image of life expressed in its eternal truth)」である、と定義する(Defence 515)。さらに、シェリーは「一篇の詩(a poem)」と「歴史(a story)」を比較し(Defence 515)、歴史が偏狭にも特定の過去の事実を並べただけであるのに対し、詩は人間の本質を普遍的に表現するものとする。

[A poem] is the creation of actions according to the unchangeable forms of human nature, as existing in the mind of the creator, which is itself the image of all other minds. [...] [It] is universal, and contains within itself the germ of a relation to

whatever motives or actions have places in the possible varieties of human nature.
(*Defence* 515)

詩が映し出すのは、創造者（詩人）以外の「他の人々の精神を映した像（the image of all other minds）」である（*Defence* 515）。従って、詩人の詩想はその個人に止まらず、人間全般の本質も網羅する「普遍的な（universal）」ものである（*Defence* 515）。さらに、鏡が映す人間の本質は、精神的美に限定される。というのも、歴史は、美しくあるはずのものを曇らせ、歪める鏡である一方、詩は、歪められたものを美しくする補正鏡だからである（“The story of particular facts is as a mirror which obscures and distorts that which should be beautiful: Poetry is a mirror which makes beautiful that which is distorted.” [*Defence* 515]）。

同様に、古代ギリシアの詩の中でも、シェリーはアテネで発祥した戯曲、特にギリシア悲劇を取り上げ、これを補正鏡に喩えて評す。

The drama at Athens or wheresoever else it may have approached to its perfection, coexisted with the moral and intellectual greatness of the age. The tragedies of the Athenian poets are as mirrors in which the spectator beholds himself, under a thin disguise of circumstance, stript of all but that ideal perfection and energy which every one feels to be the internal type of all that he loves, admires, and would become. (*Defence* 519-20)

ここでは、ギリシア悲劇が映し出す観客自身の姿は、観る者の環境に違いこそあれ、観客の精神に内在する「理想的な完成とエネルギー（ideal perfection and energy）」である（*Defence* 520）。さらに、この「理想的な完成とエネルギー」は、万人が愛を注ぎ、賞賛し、一体化を望む「内なる型（the internal type）」である（*Defence* 520）。シェリーはプラトンの芸術論には異論を唱える一方で、そのアイデアの概念とそれに付随する美や永遠性の概念を自らの詩論に織り込ん

でいる。⁸ 確かに、鏡は観客の精神内部を映しているのだが、観客の「理想的な完成とエネルギー」の形容詞「理想的な (ideal)」から、プラトンのアイデアをも連想させる。⁹ また、この「理想的な完成とエネルギー」が「内なる型」とも呼びかえられるとすると、「内なる型」との一体化を望む愛は、プラトンの言う、愛とも考えられる。¹⁰ すると、ギリシア悲劇が映し出す理想の完成や内なる型も、精神的な「理想美」(美のアイデア)である。¹¹ シェリーの詩作品『エピサイキディオン』(*Epipsychidion*)においても、理想の女性 (Emiy) が鏡に喩えられ、その鏡面では「すべてが栄光に満ちているように見える (All shapes look glorious)」という (*Epipsychidion* 32)。このような補正鏡を思わせる鏡の特質に関して、ジョセフ・ウォレン・ビーチ (Joseph Warren Beach) は、シェリーに見られるプラトン主義と鏡の特質を関連させて、鏡が映すものを「原型となる現実 (the original reality)」と呼ぶ (Beach 249)。つまり、シェリーの鏡面において、自然の事実は後景化されて、魂のアイデアが前景化される、補正鏡なのである。同様に、『詩の弁護』においても、ギリシア悲劇は観客の魂のアイデアを前景化して映していると言えるだろう。

他方、アテネの悲劇とは対照的に、古代ローマ詩人の鏡が映すのはアイデアの影である。ローマ人がギリシア人をただ模している間は、ギリシアの詩想を、真の意味で自分たちのものにすることはできなかった、という。

[...] Horace, Catullus, Ovid, and generally the other great writers of the Virgilian age, saw man and nature in the mirror of Greece. The institutions also and the religion of Rome were less poetical than those of Greece, as the shadow is less vivid than the substance. Hence poetry in Rome, seemed to follow rather than accompany the perfection of political and domestic society. (*Defence* 523)

ホラティウス、カトゥルス、オウィディウスのような、典型的ローマ詩人らは、ギリシアの鏡を覗き込み、人間や自然の詩想を読み取ろうとする。だが、ロー

マ人が読み取ったのは、本物に比べて生彩を欠いた詩想の影でしかない。ギリシア悲劇の鏡像が美のアイデアだとすると、ローマ人の鏡に映る「影 (the shadow)」は、真の精神的美ではない (Defence 523)。このように、『詩の弁護』における鏡にプラトン主義的含意を読み取ると、ギリシアの悲劇もローマ人の鏡も、両者の映すものは、詩人を含めた人間個人の精神内部にとどまるものではなく、人間の外側にあるアイデア界、もしくはアイデア界の影を映し出している可能性もある。¹² 実際、『詩の弁護』で、詩想の光は美德、愛、愛国心、友愛と関連性を持ち、プラトン主義の色を帯びて天上にある「永遠の領域 (those eternal regions)」から発せられる (Defence 531)。¹³ そうすると、鏡はどの方向を向いて対象を映し出しているのだろうか。

5. プリズム形かつ多面体の鏡のモチーフ

シェリーは戯曲も詩のカテゴリーに含めてその社会的効力を説明するため、「プリズム形の多面鏡 (a prismatic and many-sided mirror)」を比喻として用いる (Defence 520)。先行研究では、シェリーが18世紀の科学者、アイザック・ニュートン (Sir Isaac Newton) による「光学」(Optiks) やゲーテ (Goethe) の色彩論の影響を受け、後期作品でプリズムと光の屈折・反射、そして反射光線の分離によって生じる白色から虹色への変容を詩的イメージとして取り入れた点が指摘されている。¹⁴ ゆえに、『詩の弁護』において、同様に、プリズムと光のイメージが取り入れられていても不自然ではない。では、この多面鏡に後続する関係代名詞節内の構文を検証し、内容を確認していく。

The drama, so long as it continues to express poetry, is as a prismatic and many-sided mirror, which collects the brightest rays of human nature and divides and reproduces them from the simplicity of these elementary forms, and touches them with majesty and beauty, and multiplies all that it reflects, and endows it with the

power of propagating its like wherever it may fall. (*Defence* 520)

戯曲はプリズム形の多面鏡に喩えられ、戯曲の特質は、人間の本质を表す光が鏡面で反射されていくありように比される。このような反射のプロセスがつつさに描写されるのは関係代名詞 *which* 節内である。この関係代名詞節内では、“collects”、“divides”、“reproduces”、“touches”、“multiplies”、“endows”といった具合に、動詞が並列し、鏡が光を集め、分解、再構成、反射するに至るまでのプロセスが描かれている (*Defence* 520)。ひとまず関係代名詞 *which* から *beauty* までの内容を概観すると、プリズム形の多面鏡は人間の性質の最も明るい光を集めて、その根本から「再生産し (*reproduce*)」、荘厳さや美を加味していく、という (*Defence* 520)。次に、“multiplies”に後続する“all that it reflects, and endows it with the power of propagating its like wherever it may fall”に注目したい (*Defence* 520)。代名詞 *it* が連続しているが、その指示内容が必ずしも同一ではないため、注意が必要である。まず、“multiplies”の目的語は“all that it reflects”であり、“it”が指示するのは、文脈から判断して、前出の“a prismatic and many-sided mirror”となる (*Defence* 520)。一方で、その次の“endows”の目的語となる“it”、そして“propagating”に後続する“its”、“wherever”の後の“it”は、すべて直前の“all that it reflects”を表す (*Defence* 520)。したがって、プリズム形の多面鏡は自身が reflect するものすべてを増殖させ、似たものを降り注ぐあらゆる場所へと伝播させていく力を与えることになる。このように、プリズム形の多面鏡が引き起こす光の増殖と伝播が、創造プロセスの比喩として使われているのである。シェリーがニュートンやゲーテを通じてプリズムと光の屈折・反射に関心を寄せていたことから、動詞“reflects”の意味は<反射する>と解するのが自然である (“To turn, throw, or cast back [beams, rays, or light]” [*OED*, “Reflect”, def. 5.a.])。

このように、戯曲の創造性は、プリズム形の多面鏡で光が集められ、分離・増殖のプロセスを経たあと、再統一されるプロセスに喩えられる。プリズム鏡

面における光の分離・増殖のプロセスは、古代ギリシア悲劇を喩えた鏡や、歴史と詩を比較する際に用いられた鏡の比喩が、映すものを補正して、人間の精神的な美へと変容させていく点を連想させる。また、シェリーは詩の表象には人間の精神に内在する要素を「組み合わせる」ことを前提としている（*Defence* 513）。この「組み合わせ」の原理も、プリズム形の多面鏡が引き起こす、分光と反射のプロセスとも矛盾しない。シェリーにとって、詩とは「言葉の本質そのものから生じており、それは人間の精神に宿る行動や情熱をもっと直接的に表して、「さらに多様で繊細な組み合わせ」を編み出しやすい」（*Defence* 513）。

[Poetry] springs from the nature itself of language, which is a more direct representation of the actions and passions of our internal being, and is susceptible of more various and delicate combinations, than colour, form, or motion [...].” (*Defence* 513)

比較級の形容詞を含む “a more direct representation [...] than colour, form, or motion” が端的に表すように（*Defence* 513）、言語表象の直接性は絶対的なものではなく、色、形、動きなどの視覚的描写に比べて相対的に位置づけられている。次に、詩とは行動や内的な情熱が「組み合わせ（combinations）」によって構成されている（*Defence* 513）。

同様に、多面鏡において、「最も輝かしい光（the brightest rays）」に喩えられた人間の本质は、戯曲という反射鏡に集められたのち、一度分解され、“reproduce” されて 組み合わせや変化によって再び生産されて 伝播される（*Defence* 520）。¹⁵ 詩の本質は、人間の精神内部における動きや情熱を組み合わせることで「より直接的に表象（a more direct representation）」をすることだと定義される（*Defence* 513）。ここで用いられる “representation” は、「再び」を表す接頭辞 re-と present（提示する）が名詞化された presentation から形成されている（*Defence* 513; *OED*, “Represent”）。つまり、人間の精神における精神内

部における動きや情熱を組み合わせ提示するプロセスの背後には<再び提示すること>ことを基本的前提として持つ。したがって、“representation”の動作内容は、多面鏡に見られた動詞“reproduce”に準じることになる(Defence 513, 520)。最初の鏡と多面鏡に見られる反射鏡の機能は、鏡に当たった光を受けとめたのち、詩人の創造力で外界に対して再び提示・生産していく、能動的動作を含んでいるのである。両者に見られる動詞 reflect が受動態の意味を持つ過去分詞形ではなく、能動態となっているのは偶然でないだろう。多面鏡においては、光がプリズムで多方面から集められ、分割されて、再びひとつにまとめられた後、外界へと放たれていく。この一連のプロセスは、“reflects”以外に、“collects”、“divides”、“reproduces”、“touches”、“multiplies”、“endows”といった、能動態の動詞で描かれている(Defence 520)。多面鏡が受けた光を能動的に再生産して発信していくさまは、動詞の連続によって示唆的に描かれている。

結び

1818～1819年に執筆された『プロメテウス』から、1821年2～3月に執筆された『詩の弁護』まで、少なくとも、シェリーは詩的ヴィジョンを通して人類の改革を目指す詩人・詩の社会的効力を信じており、詩の社会的効力の主張を作品の主要テーマとしていた。¹⁶ アテネで発祥した古代の戯曲をめぐるシェリーの議論を振り返ると、観客にもたらす効力として観客の教化が挙げられる。シェリーによれば、上質な戯曲は、特に、観客から非難や憎悪を引き出すよりもむしろ、人間の精神にとって「自分に似たもの(“that which it [the mind] resemble”)」を映し出し、自己認識や自己尊重の契機を与える、という(Defence 520)。さらに、戯曲の形態は、詩の表現形態と最も強く結びつき、「社会的善(social good)」とも強く結びつくからである(Defence 521)。だが、戯曲を含めた詩の効力は、このような人類の倫理的改善に限定されず、人間の精神の目

覚めと拡大を促すものである (“ It [Poetry] awakens and enlarges the mind itself ” [*Defence* 517])。つまり、『詩の弁護』執筆時のシェリーにとって、詩（人）が社会で果たす役割は、人類の精神が発展するのを扶助することにある、その効力が及ばず範囲も普遍性を持つ。このようなシェリーの思想的・信教的背景を考慮に入ると、『詩の弁護』のテーマが詩の表象原理を体系化することにとどまらず、詩の社会的貢献面や社会的効力を弁護することにあるのは明らかである。そうすると、『詩の弁護』において、鏡面（詩のテキスト）における写像（概念・構想の表象）ばかりではなく、反射鏡が鏡面の外（テキストの外にある社会）へ光を跳ね返していく現象も、大きな意味を持つ。この意味で、『詩の弁護』における最初の鏡は、反射鏡の機能を持つ重要な比喻である。同時に、『詩の弁護』における鏡の比喻の中でも、「プリズム形の多面鏡」の比喻は、その他の鏡が持つ特質をひとつに凝縮している（*Defence* 520）。まず、このプリズム鏡は多面体として人間精神に普遍的に内在するものを多方面から集めることができる。さらに、プリズムで集められたものは、美や善へと変容され、鏡面で、外の世界へと跳ね返されていく。つまり、シェリーにとって、詩が社会で果たす役割とは、人間精神に普遍的に内在する美や善を多方面から集めて、再生産したものを言葉で映し出し、能動的に社会に伝播することで、人類が意思疎通を図り、人類の精神を向上させることだったのである。『詩の弁護』において、鏡による光の反射は、このすべての要素を表すのに必要な比喻として機能している。

Notes

¹ *Defence* 535を参照のこと。また、ピーコックへ直接的に反論を行い、戯曲を含めた詩の社会的効力を強調しているのは、*Defence* 519。なお、シェリーは当初、『詩の弁護』を全3部構成の予定をしており、現存する『詩の弁護』の最終段落は第一部の締めくくりである。*Defence* 535; *Letters* 2: 275を参照のこと。

² 鏡は、シェリーが散文・韻文、執筆時期を問わず、好んで用いた比喻・モチーフ

である。1815年執筆の物語詩「アラスター あるいは孤独の霊」(“Alastor; Or, The Spirit of Solitude”)や1818～1819年に執筆された詩劇『鎖を解かれたプロメテウス - 四幕から成る抒情劇』(*Prometheus Unbound: A Lyrical Drama in Four Acts*)など、作品全般を通じて繰り返し登場し、『詩の弁護』以外のシェリー作品でも鏡は人間の精神を像として映し出す。“Alastor” 405-408; *Adonais* 484-85; *The Cenci* 5.1.19-21; *Prometheus* 4.382-84; “On Love” 504などを参照のこと。以下、『プロメテウス』は *Prometheus*、「アラスター」は “Alastor” と略記。

- ³ 例えば、Abrams 127-30; Hall 156-57; Ware 558を参照のこと。
- ⁴ ナルキッソス神話やナルシズムへの傾倒に関しては、例えば、Bonca 46, 163, 284 n83; Keach 84; Schapiro 1-32、プラトンや新プラトン主義からの影響に関しては、例えば Abrams 126-32; Gelpi 159-65; Ware 556-58; Wasserman 204-206を参照のこと。
- ⁵ Keach 18 『詩の弁護』のテキストは *Defence* 515を参照のこと。
- ⁶ Keach 18 『詩の弁護』のテキストは *Defence* 513, 515を参照のこと。
- ⁷ 「巨大な兆し (“the mirrors of the gigantic shadows”)」の名詞 shadows は、文脈から判断して、影や闇という意味ではない(*Defence* 535)。OED の定義は、“An obscure indication; a symbol, type; prefiguration; foreshadowing” (*OED*, “shadow”, def. 6. c.) を参照のこと。
- ⁸ Notopoulous 347-48. Abrams 127, 129; Read 210-11も参照のこと。
- ⁹ *Defence* 520. *OED*, “ideal”, def. 1.a.
- ¹⁰ *Defence* 520. シェリーはプラトンの『饗宴』(*Symposium*)から影響を受け、「アラスター」における序文や『プロメテウス』と同様、『詩の弁護』において、理想美との一体化を追求する愛を描く。*Defence* 517; *Prometheus* 3.3.50-63; “Alastor”, Preface 73を参照。この問題に言及する先行研究については、Notopoulous 348; Read 212, 213; Shelley, *Shelley and Scripture* 122.を参照のこと。
- ¹¹ アテネの悲劇が映し出す「理想の完成」や「内なる型」は、シェリー訳『饗宴』(“The Banquet” [原題は *Symposium*])で言及される「理想美 (intellectual beauty)」を想起させる (*Defence* 520; “The Banquet” 449)。
- ¹² プラトンの『国家』(*The Republic*) 第6～7巻は洞窟の比喻に関連し、アイデアの影には、洞窟の壁に投影される影のみならず、水鏡に映る像も含む (“reflections in water” [109, 125])。ここで、プラトンは、アイデアを太陽の光に喩え (“the light of the sun” [*Republic* 125])、その光源を高方に位置付ける (“see the things higher up” [*Republic* 125])。
- ¹³ Beach 265; Grabo, *Meaning of The Witch of Atlas* 29; Solve 43.
- ¹⁴ 例えば、Burwick 257, 265, 267-68, 273; Grabo, *A Newton among Poets: Shelley's Use of*

Science in Prometheus Unbound 89-90; O'Malley 179を参照のこと。

¹⁵ 動詞 reproduce は “ To produce again by means of combination or change ” と定義される (*OED*, “Reproduce”, def. 2.)

¹⁶ Woodman, “Shelley’s Changing Attitude to Plato” 508. Roberts 293-94; Shelley, *Shelley and Scripture* 131; Woodman, *The Apocalyptic Vision* 3も参照のこと。

Works Cited

- Abrams, M. H. *The Mirror and the Lamp: Romantic Theory and the Critical Tradition*. Oxford: Oxford UP, 1953.
- Beach, Joseph Warren. *The Concept of Nature in Nineteenth-Century English Poetry*. NY: Pageant, 1956.
- Bonca, Teddi Chichester. *Shelley’s Mirrors of Love: Narcissism, Sacrifice, and Sorority*. Albany: State U of New York P, 1999.
- Burwick, Frederick. *The Damnation of Newton: Goethe’s Color Theory and Romantic Perception*. Berlin: Gruyter, 1986.
- Butter, Peter. *Shelley’s Idols of the Cave*. Edinburgh: Edinburgh UP, 1954.
- Gelpi, Barbara Charlesworth. *Shelley’s Goddess: Maternity, Language, Subjectivity*. Oxford: Oxford UP, 1992.
- Grabo, Carl. *A Newton among Poets: Shelley’s Use of Science in Prometheus Unbound*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1930.
- . *Meaning of the Witch of Atlas*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1935.
- Hall, Jean. “The Divine and the Dispassionate Selves: Shelley’s *Defence* and Peacock’s *The Four Ages of Poetry*.” *Keats-Shelley Journal* 41 (1992): 139-63.
- “Ideal.” *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. 1989.
- Keach, William. *Shelley’s Style*. NY: Methuen, 1984.
- Notopoulos, James A. *The Platonism of Shelley: A Study of Platonism and the Poetic Mind*. NY: Octagon, 1969.
- O’Mally, Glenn. “Shelley’s ‘Air-Prism’: The Synesthetic Scheme of *Alastor*.” *Modern Philology* 55.3 (1958): 178-87.
- Peacock, Thomas Love. “The Four Ages of Poetry.” *Peacock’s Four Ages of Poetry, Shelley’s Defence of Poetry, Browning’s Essay on Shelley*. Ed. H. F. B. Brett-Smith. Oxford: Blackwell, 1953.
- Plato. *Plato The Republic : With an English Translation*. Trans. Paul Shorey. London:

- Heinemann, 1956.
- . "The Banquet: Translated from Plato." Trans. Percy Bysshe Shelley. *The Platonism of Shelley: A Study of Platonism and the Poetic Mind*. Ed. James A. Notopoulos. NY: Octagon, 1969. 414-61.
- Read, Herbert. "Shelley's Philosophy." *The Major English Romantic Poets: A Symposium in Reappraisal*. Eds. Clarence D. Thorpe, Carlos Baker and Bennett Weaver. Carbondale: Southern Illinois UP, 1957. 207-14.
- "Reflect." *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. 1989.
- "Representation." *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. 1989.
- "Reproduce." *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. 1989.
- Roberts, Hugh. *Shelley and the Chaos of History: A New Politics of Poetry*. Pennsylvania: Pennsylvania State UP, 1997.
- Shapiro, Barbara A. *The Romantic Mother: Narcissistic Patterns in Romantic Poetry*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1983.
- "Shadow." *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. 1989.
- Shelley, Bryan. *Shelley and Scripture: The Interpreting Angel*. Oxford: Clarendon P, 1994.
- Shelley, Percy Bysshe. *Shelley's Poetry and Prose: Authoritative Texts, Criticism*. Eds. Donald H. Reiman and Neil Fraistat. 2nd ed. NY: Norton, 2002.
- . *The Letters of Percy Bysshe Shelley*. Ed. Frederic L. Jones. 2 vols. Oxford: Clarendon, 1964.
- Solve, Melvin T. *Shelley: His Theory of Poetry*. Chicago: U of Chicago P, 1978.
- Verkoren, Lucas. *A Study of Shelley's 'Defence of Poetry': Its Origin, Textual History, Sources and Significance*. NY: Haskell, 1970.
- Ware, Tracy. "Shelley's Platonism in *A Defence of Poetry*." *SEL* 23.4 (1983): 549-66.
- Wasserman, Earl R. *Shelley: A Critical Reading*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1971.
- Woodman, Ross Greig. *The Apocalyptic Vision in the Poetry of Shelley*. Toronto: U of Toronto P, 1964.
- . "Shelley's Changing Attitude to Plato." *Journal of the History of Ideas* 21.4 (1960): 497-510.

A Reconsideration of P. B. Shelley's Mirror in *A Defence of Poetry*:

With the Meaning of the Verb “Reflect” as a Clue

Keiko Ikeda

Throughout his poetical and prose works, P. B. Shelley repeatedly uses a metaphor of mirror. In his essay, *A Defence of Poetry*, we can find the metaphors.

It is true that Shelley describes some mirrors as visualizing the truth of human minds. Thus, readers might interpret the mirrors in *Defence* likewise if they consider either Plato's influence upon Shelley's view on arts, or Shelley's preference for Narcissism in his poetical works. However, critics have not discussed all the metaphors in *Defence*. Instead, they have simplified most of Shelley's mirrors as (neo-) Platonic or Narcissistic metaphors which visualize the images of human minds. The purpose of this study is to reconsider the metaphorical significance of the mirrors, especially as a reflector and as a prismatic and many-sided mirror in *Defence*. To consider their significance in *Defence*, I examine the way the mirrors reflect the light. In his comparison of poetry and other arts (pictures, music, sculptures) in *Defence*, Shelley likens the former to a mirror, and the latter to a cloud.

The mirror is a metaphor of a poet's language (expression) while the light is that of a poet's thought (conception). Poetical language directly represents a poet's thought as a mirror reflects the light. On the other hand, other arts' materials do this less directly as a cloud weakens the light. The light is the medium of communication, which refers to the poetical thought hidden in both the poet's and other human minds. In this context, the light of the poetical thought comes from both a poet's, and the human mind. Additionally, Shelley regards the sources of the light as two kinds: the human mind and the external world. For example, when Shelley appreciates the ancient Greek dramas as a mode of poetical expression, the tragedies of Athens are compared to mirrors which reflect the ideal forms of the spectator's mind. In this way, Shelley's mirrors (poetical expressions) in *Defence* trans-

forms the original reality in the world into the poetical thought (the ideal forms of human minds). In a similar way, a prismatic and many-sided mirror collects, recreates, and turns back the light into the external society. This process of reflecting the light not only shows the poetical creativity and the multi-faceted approach to the poetical thought, but also emphasizes the poetry's social contribution.